孫木果拾遺

前篇

拾遺

へ13
3318
15

茶樹榮

錦木茶花孫茶茶卷之拾遺

目錄

一 岩陰國津の國より黄金の花咲事
　　茶園橋巨藏盜賊高性の事
一 白糸をもつて茶小事

大正十年八月廿九日寄贈
本大學出版部

へ13
3318
15

錦木第拾新第四巻之拾式

左陸国津の国より黄金の花咲事

英国情巨獣出産の事

左よ左陸の玉津の島の一村大

ひよ国霧しく貧苦より

きちをつりて左人への姫を

あ仮ちをつ霧ちをよ

あさ

人とまゐりあげ」してたれ
ども死なんかうまれまさい生
甲斐もなきさまと思ひ切て
首縊りて死なん」とまどろん
でゐくの者ども稲田帰雲が
宿とこそなりぬ百姓の金をも
かりひそかに五十両づゝ呉れく
ず貧をうけてまさい世界の風俗を
聞て困窮の家なれば去年より
十五二十五と俵米よりて表より
投込て何のの仕業ともわかれば
却て仏の焼しまうこれは
まさしく天狗さまの所為と推
いなびきくて今日下界を去

こゝ国霧の眼がさめてたゞひと
ひとりぐらくそ見の金ちよまち
しいきりひよこ金一て氣くと
飾きゝ市ばはものづくり書る
を岩ふよ幽暮くぐぬるうち
毛紙いふもちくを陰の金
ほの高よ黄金の花が咲ん さよ

あと星の童しこ嘆ーうちは
ゐとゝよ天のちちと幸ひと雲敵
をうてれ中い怪ぶ中よ角古
濃ちゝ音古の金のを考ひ
てを通の作ものをそるようも
獨ぶ出りてをうし身代の
ふ紙合も天翼の鳥の雲翼の

教ひと言を聞て写れを為し
強く邪法の心を動ずして
慈悲善根を修し「一念発起し
て仏智の切なよりつきれ
ば仏心の尊の角於て今を
仏の角在虚とをかんへをや
ゆる大無量の御誓ども

角在者が身よりては後世の著
拠よ等く大善智識をもつべ
しされば一切衆生のちき
大全を持の角在虚のとふよう
然者を角者と他名せがまま
者侍の玉よりの名とつふ不分
つのおりとふ不有れば りや

里の家をうの家よりそそなひ
て浦の名と云しう是亦あし
と雄名の社へ清浦とふへと
是稚れども孫年中より家板
ヤし如多の持拾びし稚多ゆよ
汝佐又云ものやうとふを
その中より名佐の浦の名の里

と書りされば仮名をてつのおち
とつるうの家を里の家と云代
りての事ちやつの名と
いつる又是もおがつちし社名の
風ちよ今ちよ先へよ事の何ふ
で郡て稲田帰藏ハ二三百名
るの今ちを待ちしてぼの名の

里の風俗なりのを殺し一村を
豊となしてさてもてろよしと
なのところ 北国をとなりあるなのも
地なるの浦みでいなりまた 北処の
ちくべて浜屋みて三里余の海道
なくなる 綱引 細度のりてこれに
数百人のんなりて綱引業

を海世とを一網より十合をあるの
千綱となりて百余の家なり
といふ綱元といふものこれ有よ
釜なりて浦上をもちいをもちいを
そなていなりしのようなりを
世有みて長輝の家をなり
五三きりと唱る声をなりく

網うち取流すよう命じ候ハ
二三里も遠く漕ぎ離して網を卸
すれハ軍船をこぎのどめて
百余艘四方下ゐも漕て出向
ひて引よせるを聞く者数百
人よりあつまるゆゑ敵よ声を掛
てよどをくく頼うよ敵うち

帰陣すれを例くよりて元和
元年しばらくの内よ年のハ
二十七歳うちる若者の頃よ
色黒きがていうあつまの鮮
ちうが酒肴つきて社網の徒を
敵あがう扱もを合の廟をハ
いうあ鬼神も敬対がうし

家も里の拍きよりてかりる銭
しきぢぶやど
安四郎の所人の業をまとり事をと
つよ所者の地獄ちう所の流れと
人の月末わどは是衆ちきものは
ちうと物りこと言いつる銅貨より
雑きた市をむすびなてこれを
安く給の上より歩てかりる者
勝をまとして引きちの奴婢
元人よりをぐれて無ちうし
うば今参旅ど御じ数百人の
中より役奴ちへ智の事を
知りまく物りごとをしをな
てたのく御しきものるも
おのまわば皆人の者

打撲をあきなひ命も多ち多ち
よ編みもとぐしとれのみよりも優
よ拵きうちて高性をなんと
と呼爲して常よりよりの用物
家の藩ものして故ものして源く
十八年の時百姓より死別れ
百ぐ流浪して去年ての

網屋の親方の世話をうけ給金
も三百貫ひしかれも仲間の
ものよ備うまでいよく用達し
此度奉公の病人を助けて力業
もちうぎれば傳兵の病帳を知ふ
よ給金をうけて全月限りもこぎ
まで命ものしてやるもなんぞ

情をくも痛ましうおもふて
もとくの郎のごとくに
とくに鼻よりあをのけてこき
付まれるといふ今もしかるを
あるに
昔仏よりおのれ今日もどりて
一樹の陰も一河の流れも他生の
縁と聞けば今新に
人の辱をうけて

側隅の上に坐して
よ然への金をもわれば
を取方よつぐのひて
のづからの上にあつまり
ちやく僧侶してその健ちう
子とめぐし新に
かくばかりを強し
人といふた

あるこころの
被者者これを学て洞をうつ先
仁義をふし海こていうる法
遠悪深き事を家邦よりこと
ちるもうぐ自とくいうる方うつぎを
してもちやこれ花書勿どよ
いわ自ぐ仏事此悪此性
よ邪もうして自自ちぐこを思

生く後世までも家自しとを
自ふ海氏年月して妖洞
よ出ぐしうば仁義をうば
とて若者を引連細屋よいる
親方よ機会て被者の給金を
つぐのうとつて親方も給
金くつぐのうとば何のこぶ

[illegible]
今三日[illegible]
[illegible]
[illegible]
張篇[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
孤独の身[illegible]
[illegible]
[illegible]
地[illegible]
[illegible]
[illegible]

氣療治をしよる日数三十日ヵ
て全快するあらばこれば無事なる
ものを引延ひて行き表へと公
さしうるあも難なるの源なれて
おとを数百人網引の中より
出居るものを集めて魚酒肴の
ものとなし漁網のあるを也

漁家の服力中くらうして華麗
なるまで用意巨額と成りて
御を海しうる身の名目
りさつて数くもちや業の妨なる
事い雲なるあて雲なる稲書
のごとく一家の中よりあて
姿も身も編みて高きる時を

煙のごとくよく清らかにて
あるもちろん第一の醤
油の臭味なく
味わいは強く
香ばしいうまみの如く
のみくだすべき
中しも京都
江戸と稲田帰参の名高し

給ふて諸人の用情豆腐
を醤油の味噌とかたちは
ちがひ
生質大器にて百姓
金ない醤を
まよふべき百一方金の
を務い諸人の貧苦を助し

ばうの隠徒の輩ひ来りて
市盗賊の侍和の名世上を
つと知れざるうち俵て寄用
市中を徘徊あるよりも方を常
し野盗賊より野盗侍の姿ゆして
同様巨家を中宵仕よりあるを
俵より遠市れば俵りて大
騒所の株墨とは言のつく者
いかうるうるきれども同様巨家
の俵判世界く流布して並く
ちまる盗賊と いふよう家家
その出俵家のれども一家所住に
して寄りあるべきようもなく
只世界の風俵のこと学って実物の

沙汰のごとくしたがうあのづから
筆をとりてかきたるとなり

白氣を義ふ事

あるよ諸事をたはかりしるる
を絶命とあづけ二官あがらも
無能にして家智相続もやや
とたりあるよ身一の因果その情も

雲く眼のおそくしらも絶命
の方をたつ事よ方ゲンとあつき
の用ともあるもの事あしく除うそれ
ば家ちうわども筆よ在のふべ
きて物い是のうしてあけまどもいら
ち者世の沙汰事あや白氣ば
色よ除く迷て食ともたれば

行の跡とされ山とかれ書かれ歌
きも作のうちの作袋と不手者
ちる幽を云くとして不惜
の里よ馬いかれども君を恋ば
常月と爲しと遠路もいとゞ
稚白髪ちる青くなりひちる
白髪と墨染衣より修行おく

逢坂のつゝき出羽の前よまとゝて
不ぶしとちる歌ば焼しと枕
者の歌よりして夜ぐの
別れを行こと嘆の弱ちを
恨もいちもちゝき偽の実
よ魂を玉しぐれて吟ぐ家
古角をちしあひし拓取て

い遠方の人を思ひて何の為
よ紙にうつせばそは新聞の
ちなればよみてこそ一すじも国の新会見
つゝもゼ延命して事毎日でも新
なる事い自由ちうこよ方東
とは情命ゝしてそれも国家の報
ゆてうまぎと遠く掛をうれ矣

よ和のひこがれよと白雲の彼の系
為ちうこと為智の洞よ赤恨の
伝ようこ無もこうき世う角

雅東栄都孫京為命定を拾玉ぬ